

聴覚障害児の発音・発語指導

大 塚 明 敏

Speech Teaching for the Hearing-impaired Children

Akitoshi OHTSUKA

は じ め に

聴覚障害児の発音・発語指導は、聾学校においては何か訓練のための訓練の内容としてイメージされている傾向があるが、本質的には単なる訓練ではなく、聴覚障害児が人間の子どもとして生来的に健常児と同様に有している発声・発音能力を基盤として日本語としての正常な発声・発音・発語能力ができるだけうまく育つように援助することである。それは現実には、日常の学校生活や家庭生活のあらゆる場面において指導されなければならないものであるし、同時に発音指導の時間として特別に用意された集中的、分析的指導の時間においても扱われなければならない内容である。後者の場合、聾学校等では「養護・訓練」の時間という名称の下に実施されることもしばしばである。いずれにしても聴覚障害児の発音・発語指導の問題は、一日を通して、あるいは、長期間を通して配慮していくべき大問題であり、そのための「ノー・ハウ」も、これまた必要となってくる。ここには、各音指導における指導上の留意点を中心に全音共通の留意点をも含めて、聴覚障害児の発音・発語指導を実施していく上で最小限必要だと思われる留意事項について、最も信頼のおけるその道の資料と、筆者自身の40年にわたる聴覚障害児教育の経験と勘とを資料として、更にはそれらを同一の経験と勘とに基いて整理したものを現在の時点における「ノー・ハウ」として

提示するものである。

I 全音に共通する指導上の留意点

- 1 日常生活のさまざまな局面においてどんどんことばをかけ、ことばを聞かせ、読話をさせ、「ことばの風呂」や「音声の風呂」にどっぷりとひたらせ、日本語の発音・発語に必要な情報を最大限に入れていくようにする。
- 2 理解できることばが増え、ことばらしいものを自発的に使い始めるようになってきたら、^{こうせいもどき}口声模倣（口真似）を誘うようにし、話しことばの全体的なパターンを模倣させるといいうやり方で発音・発語指導を開始する。グローバルな語調模倣から始めて音節をもモデルに合わせられる分節模倣に至るまで序々に分化させ、正しく口声模倣をする技能を育てていく。なお、技能的にはモデルの話しことばに逐次ついていく逐次模倣と話し手が言い終ってから反唱する追唱模倣の両方の能力を育てていくようにする。同時に教師から口声模倣を求められた時、直ちに口声模倣にのっていく習慣・態度も身につけさせるようにする。
- 3 口声模倣によって自然に出るようになった音や、出そうな音から拾い上げてことばとして練習し、固定していくようにする。この場合、絵カードや文字カードを活用する。
- 4 補聴器をかけて口の動きを見ながらの口声

模倣だけでなく、聴覚のみからの刺激による音声模倣をも必ず取り入れていくようにする。すなわち耳からことばを聴かせては真似て言わせるという作業を何度も何度もくり返すわけである。

- 5 口声模倣だけで目的とする音が出ない場合には、一音として抽出し、呼吸模倣（息づかいの模倣）、触知模倣（振動・筋肉運動模倣）、手示サイン、文字、色記号（有声一赤，無声＝息一青，鼻音一黄色），その他、教材教具等を用いて誘導し、再びことばの中に入れ込んでやるようにする。なお、出るようになった音についてはできるだけ手示サイン、発音記号、文字等の視覚記号と結びつけておくようにし、音表象や音韻表象の確立をはかるようにする。
- 6 指導しようとする音を語頭、語中、語尾に含むことばを用意して練習し、ことばを構成するひとつの音として定位、定着するようにする。その場合は、「まずは聞かせて（読話＋聴覚学容）わからせて、一語に言わせて真似（口声模倣）をさせ、自分で言わせて総仕上げ」という手順で扱うことを原則とする。

例 「タ」音の指導用語

語 頭	語 中	語 尾
タ マ ゴ	ボ タ ン	ブ タ
タン ボ ボ	タ タ ミ	バ ッ タ
タ ケ ウ マ	ネ ク タイ	タ ナ バ タ

- 7 なかなか出ない音については、すぐに出させようと思ってあせらないようにし、その基礎指導をしたり、あるいは、他の出そうな音から扱っていくようにする。
- 8 出せるようになった音は、できるだけ回数多く生活の中で使わせるようにする。
- 9 語や文は、一音ごとに区切らないで、ひとかたまりのことばや、ひと流れのことばとして発語させるようにする。
- 10 教師は聴覚障害児の異常な発声や発音、発語が真似られることが必要である。そうすれ

ば発声、発音、発語上、どこに問題があるかを診断することができ、またそれについての対策も考えることができるからである。

- 11 どの音もひとつの音として出せるだけでなく語や文の中でも使えるようになるまで指導していくようにする。
- 12 どの音も最初からできるだけ子音＋母音＝音節の形をとる、いわゆる熟音としての指導を心がけるようにする。
- 13 発音・発語指導とは、聴覚障害児に対して正常な日本語の発音・発語の発達を援助することであるという基本的方向性を忘却しないで指導に臨むようにする。
- 14 発音・発語指導とて学習指導であることにおいては変わらないので、できるだけ、押しつけは避け、無理なく、無駄なく、丁度よく、かつ自然に、寛いだ雰囲気の中で指導されることが望ましい。
- 15 指導を一貫して継続し、コツコツと積み上げていくことが発音・発語指導に成果を上げるコツである。
- 16 定期的に発音・発語の発達を評価しながら指導を進めるようにする。

II 各音指導上の留意点

1 【ア、イ、ウ、エ、オ】音、指導上の留意点

【ア、イ、ウ、エ、オ】音、共通

○ 母音「ア、イ、ウ、エ、オ」音は日本語の音韻、音節構成上、最も重要な意味をもつ基礎的な音であるので、その確立へ向けて特に入念な指導が必要である。何と言っても日本語の発音を、日本語の発音らしくする最大の要素は「ア、イ、ウ、エ、オ」音であり、その安定なくしては到底明瞭な発音など期待すべくもないと言ってよからう。

○ 日常の生活場面において豊かにことばをかけることによって「ア、イ、ウ、エ、オ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模

倣（口真似）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

- ① 日常生活の中でことばを沢山聞かせたり、読話させたりして頻度多く「ア、イ、ウ、エ、オ」音に触れさせておく。
- ② 日常生活の中でことばをいくつも理解できるようにしておく。
- ③ 子どもが自発的にことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。
- ④ 日常生活の中でいろいろなことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする「ア、イ、ウ、エ、オ」音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ できるだけ子どもの恣意的な発声表現を観察し、それを基盤として「ア、イ、ウ、エ、オ」音へ誘導して行くようにする。

○ 「ア、イ、ウ、エ、オ」音の根源をなすのは声であるので、子どもらしい、明るい、柔かい、自然な声、すなわち、語音を発するのに対応しい声を誘導する。

○ 「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」をそれぞれ単音で練習するのでなく、できるだけことばの中で、すなわち、語や文の中で誘導するように心がける。

○ 全身、および、唇、舌、喉などを緊張させないで楽にして声を出させるようにする。

○ 「ア、イ、ウ、エ、オ」が「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」にならないようにする。そのためには基礎練習として息と声を区別して出す練習をしておくのがよい。

○ 「ア、イ、ウ、エ、オ」が鼻音化しないようにする。鼻音化する場合には教師の鼻の側面や鼻の穴に人差し指を当てさせて、振動の有無を感知させ、正しい「ア、イ、ウ、エ、オ」の発音との違いをわからせるようにする。

○ 「ア、イ、ウ、エ、オ」を発音する時、必要以上に口を開けたり、あごを落としたりしないようにする。

○ 舌の位置や安定に注意する。

○ 口形の開閉を正しくする。

〔ア〕音

○ 「ア」を発音する時、「エ」程度に口を開き「エ」とまぎれるような発音をしないようにする。この場合は口をもっと開かせればよい。

○ 「ア」を発音する時、「オ」程度に口を開き「オ」とまぎれるような発音をしないようにする。この場合は口をもっと開かせればよい。

○ 舌全体を奥へ引いて発音しないようにする。

○ 舌をねじったり、動かしたりしないようにする。

○ 舌尖を下歯の上ののせて発音しないようにする。

○ 舌尖に力を入れ、舌を細長くして発音しないようにする。

○ 中舌を高くして発音しないようにする。

〔イ〕音

○ 唇を左右に引き過ぎないようにする。

○ 「イ」を発音する時、「ヒ」や「シ」などの余分な音が入らないようにする。

○ 「イ」が「ウ」にならないようにする。舌を高めるのを少し前の方でやるように指導したがい。

○ 「イ」が「エ」にならないようにする。

○ 「イ」が「オ」にならないようにする。

○ 「イ」を発音する時、歯を打ち合わせないようにする。

○ 「イ」と発音する時は「ア」の場合より舌を高める必要があることを子どもに知らせるようにする。子どもの人差し指を教師の口の中に入れて「ア→エ→イ」「ア→オ→ウ」などと言ってやれば舌の高まりの様子が子どもに触知できる。

○ 「イ→エ→ア→オ→ウ」「ウ→オ→ア→エ→イ」というような練習をさせて「イ」を発音する位置をはっきり決めるようにする。

〔ウ〕音

○ 話しことばに用いる「ウ」は口を丸める「ウ」

ではなく、ひらたい口で発音する「ウ」であることを念頭において指導する。

- 舌の奥を高くすることが「ウ」をそれらしく発音する大事な要件である。
- 舌の面が前の方へあがると「イ」に近い音になりやすい。
- あごの閉じ方が足りないと「オ」に近い音になりやすい。
- 唇の両端をいくらか寄せてこないと「イ」に近い音になりやすい。

- 唇を突き出して発音しないようにする。
- 上下の歯が見えるようにして発音しないようにする。

- 舌を奥に引いて発音しないようにする。

〔エ〕音

- 「エ」の時の舌は全体的に前の方へ舌の前の部分が押し寄せられて、その調音面がかなり上昇していることを念頭において指導する。
- 唇を左右に引き過ぎないようにする。
- 「エ」を発音する時、あごを落とし過ぎて「ア」にならないようにする。
- 舌先を下歯の上のせて発音しないようにする。
- 下歯裏に舌先を押し当てて前舌面を前方に押し出して「エ」と発音しないようにする。聴覚障害児が「エ」を発音する時、よく見られる傾向である。
- 「エ」が「イ」とならないようにする。「エ」と発音する時のあごの閉じ過ぎや舌の高め過ぎによって起こることが多い。
- 舌の位置を「ア」の時と同様のまま「エ」の発音をしないようにする。不明瞭な「エ」や「ア」になりやすいからである。「エ」の発音をする時は中舌の両側が上奥歯にふれるぐらいの位置まで高める必要がある。

〔オ〕音

- 「オ」が「ア」にならないようにする。
- 「オ」を「ア」と発音しやすい子どもに対しては「ウ」から「オ」に移らせて正しい「オ」の発音を誘導する。

- 唇を突き出して発音しないようにする。
- 舌を引き過ぎて奥舌で喉を押しつけるようにして発音しないようにする。
- 舌面の高まりが足りないと「オ」らしく聞こえなくなる。
- 下あごに力を入れて発音しないようにする。
- 喉に力を入れて発音しないようにする。

2 〔カ、キ、ク、ケ、コ〕音、指導上の留意点

〔カ、キ、ク、ケ、コ〕音、共通

- 「カ、キ、ク、ケ、コ」音は日本語の発音の中では使われる頻度が高く、しかもめりはりをつけるのに欠くべからざる音であるので、特にその指導に当たっては正確を期すようにする。

- 日常の生活場面において「カ、キ、ク、ケ、コ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）や呼気模倣（〔k〕の息づかいの模倣）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

- ① 日常生活の中で「カ、キ、ク、ケ、コ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、〔k〕を掌で触れさせたりして、頻度多く「カ、キ、ク、ケ、コ」音に触れさせておく。

- ② 日常生活の中で「カ、キ、ク、ケ、コ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

- ③ 子どもが自発的に「カ、キ、ク、ケ、コ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

- ④ 日常生活の中で「カ、キ、ク、ケ、コ」音を含むことばの口声模倣や呼気模倣（息づかいの模倣）を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

- 口声模倣だけでは「カ、キ、ク、ケ、コ」

音が出ない子どもについては、うがいをういて誘導する。奥舌と軟口蓋で息をつめて破裂させる要領が、子音[k]の調音要領と似ているからである。ただし、うがいの場合の息をつめる箇所は[k]の調音点より少し奥まっているので調音点としてでなく誘導点として考えておくのが妥当である。この場合、口形を小さくして頭をあまり上にあげずにうがいをさせると、息をつめる箇所がやや[k]の調音点に接近していく。

○ 聴覚障害児の場合、最初のうち、うがいすらできない子もいるものである。その時は、口の中に入れてやった水を奥舌で止めさせ、鼻をつまんで鼻から息ができないようにしてやると、口から息が出てうがいができるようになってくる。ともあれ、「カ、キ、ク、ケ、コ」音の基礎づくりとして、「うがい」は「うがい」として練習を重ねておくようにする。

○ 「カ、キ、ク、ケ、コ」音の指導に入る前に破裂音としてそれより簡単な「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音や「タ、チ、ツ、テ、ト」音を確実に調音できるようにしておく。[p][t]等の息をつめて破裂させる要領が[k]の調音要領の基礎づくりとして役立つからである。

○ 口声模倣やうがいからの誘導でも[k]が出ない場合には「タ、テ、ト」音より「カ、ケ、コ」音を誘導する。具体的には、舌の先を舌圧子やアイスクリームのへら、スプーン等で压えて「タ、テ、ト」と発音させ、奥舌を隆起させて、「カ、ケ、コ」の発音を誘うようにする。

○ 「カ」よりも、むしろ「コ」から出し始めていった方が[k]を誘導するのに無理がない。

○ 子音部の[k]を発する時、破裂が強くなりすぎないように気をつける。強すぎる場合には子どもの掌を教師の口許に持って行き、軽く[k]と言ってやって、その時の呼気を感じを真似て再現させるようにする。

○ 摩擦音の伴った破裂にして[k]を発音しないようにする。奥舌面を瞬間的に軟口蓋から離して[k]を発するようになればよい。

○ 「カ、キ、ク、ケ、コ」が鼻音化して「カ^h、キ^h、ク^h、ケ^h、コ^h」とならないようにする。

○ 「カ、キ、ク、ケ、コ」が有声化して「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」とならないようにする。

○ 「カ、キ、ク、ケ、コ」が子音[k]の前に母音を先行させて、「アカ、イキ、ウク、エケ、オコ」とならないようにする。

○ 同じ「カ、キ、ク、ケ、コ」音でも「カ、ク、ケ、コ」音と「キ」音とでは調音位置が少し違い、「キ」音では舌が口蓋に接する場所がやや前になることを知って指導する。

○ 狙いとする「カ、キ、ク、ケ、コ」音の前に「パ、ピ、プ、ペ、ポ音」「タ、チ、ツ、テ、ト」音、「カ、キ、ク、ケ、コ」音が来ることを用いて口声模倣をさせて誘導するのもひとつの方法である。

例 パカパカ、プカプカ、ポコポコ、ポケット、ペコペコ、テクテク、トコトコ、タカイ、タケ、トケイ、コケコッコ、カケッコ

[カ] 音

○ 喉に力を入れ過ぎないようにする。

○ 奥舌面全体を動かして前に出さないようにする。

○ 下あごを開き過ぎないようにする。開き過ぎると調音点が奥へ移動する。

○ 息をつめて「カ」と発音する際、下歯茎の根元や舌小帯へ舌先をつけて、舌をぐっと下げて発音しないようにする。

[キ] 音

○ 舌を奥へ引き過ぎないようにする。

○ 舌の位置が前過ぎて「チ」にならないように気をつける。

[ク] 音

○ 舌の面をかたくして幅をせばめ、中高にして発音しないようにする。

○ 舌を奥に引き過ぎないようにする。

[ケ] 音

○ あごを開き過ぎないようにする。開き過ぎると「カ」に近い音や「カ」になってしまう。

[コ] 音

- あごを開き過ぎないようにする。
- 「キ」や「ケ」の調音点で、つまり、前過ぎる舌の位置で [k] を発しないようにする。

3 「サ、シ、ス、セ、ソ」音、指導上の留意点

「サ、シ、ス、セ、ソ」音、共通

- 「サ、シ、ス、セ、ソ」音は日本語の発音の中では使われる頻度が高く、しかもめりはりをつけるのに欠くべからざる音であるので、特にその指導に当たっては正確を期すようにする。

○ 日常の生活場面において「サ、シ、ス、セ、ソ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）や呼気模倣（[s] や [ʃ] の息づかいの模倣）によって自然に誘導するように必がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「サ、シ、ス、セ、ソ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、[s] や [ʃ] を掌で触知させたりして、頻度多く「サ、シ、ス、セ、ソ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「サ、シ、ス、セ、ソ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「サ、シ、ス、セ、ソ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「サ、シ、ス、セ、ソ」音を含むことばの口声模倣や呼気模倣（息づかいの模倣）を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「サ、ス、セ、ソ」の子音は [s] で、「シ」の子音は [ʃ] であることを知って指導に臨むようにする。

○ [s] や [ʃ] は聴覚的にも読話的にもとらえることが非常に困難な音であるので子どもの

掌で息づかいを触知させ、それを真似て再現させるようにして誘導したり、ストローを用いて挟む位置を変えて吹かせ、[s] や [ʃ] の調音要領を誘導したりする。

○ 「サ、シ、ス、セ、ソ」音の前に「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音が来ることばを用いて口声模倣や呼気模倣（掌での触知による息づかいの模倣）をさせて誘導するのもひとつの工夫である。

例 ハサミ、ハシッタ、ハス、ノハナ、ハシ、フシ、フスマ、フサ、フウセン、ホソイ、ヘソ
○ 子音や母音の部分を長くのばし過ぎて「sーアー、ʃーイー、sーウー、sーエー、sーオー」にならないようにする。

○ 「s・ア・ʃ・イ・s・ウ・s・エ、s・オ」と二音的に発音しないようにする。

○ 母音なしの無声化した「サ、シ、ス、セ、ソ」や、子音の強過ぎる促音化した「サッ、シッ、スッ、セッ、ソッ」にならないようにする。

○ 「ありま③」「ありま④た」等の場合の「す」や「し」は必ず無声化して用いるよう習慣づける。

○ サ、シ、ス、セ、ソ」が有声化して「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」にならないようにする。

○ 「サ、シ、ス、セ、ソ」が「タ、チ、ツ、テ、ト」や「チャ、チュ、チョ」「ヤ、ユ、ヨ」とならないようにする。

○ [ʃ] は [s] より出しやすい音であるが、この音を先に指導すると、「サ、シ、ス、セ、ソ」が「シャ、シ、シュ、シェ、ショ」になる恐れがある。

○ 子音部を構成する [s] [ʃ] の息づかいを強過ぎないようにする。楽な出し方でないことばの中で生きなかつたり、聞きづらい「サ、シ、ス、セ、ソ」になったりする。

○ 「サ」行音の指導の順序は、「セ」→「サ」→「ソ」→「ス」か、「ス」→「ソ」→「セ」→「サ」の順序で扱うのが無理がない。

「シ」音

○ 発音する時、唇の両端を引き過ぎないようにする。

○ 「シ」が「ヒ」や「イ」にならないようにする。

○ 「シ」ともつかない、「ヒ」ともつかない曖昧音にならないようにする。

〔ス〕音

○ 子音部〔s〕の発音から母音部の発音に移る時、唇をすばめないようにする。

〔サ・セ・ソ〕音

○ 子音〔s〕より母音、「ア・エ・オ」に移る時、必要以上に下あごを下げないようにする。

4 「タ、チ、ツ、テ、ト」音、指導上の留意点

〔タ、チ、ツ、テ、ト〕音、共通

○ 「タ、チ、ツ、テ、ト」音は、日本語の発音の中では使われる頻度も高く、しかもめりはりをつけるのに欠くべからざる音であるので特にその指導に当たっては正確を期すようにする。

○ 日常の生活場面において「タ、チ、ツ、テ、ト」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣(口真似)や呼気模倣([t] [ts] [tʃ]等の息づかいの模倣)によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「タ、チ、ツ、テ、ト」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、[t] [ts] [tʃ]等を掌で触知させたりして、頻度多く「タ、チ、ツ、テ、ト」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「タ、チ、ツ、テ、ト」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「タ、チ、ツ、テ、ト」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「タ、チ、ツ、テ、ト」音を含むことばの口声模倣や呼気模倣(息づかいの模倣)を誘うようにする。そして、狙いとす

る音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「タ、テ、ト」の子音[t]と「チ」の子音[tʃ]、「ツ」の子音[ts]は、それぞれ違うことを知って指導に臨むようにする。

○ 「タ、チ、ツ、テ、ト」音の指導に入る前に破裂音としてそれより簡単な「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音を確実に調音できるようにしておく。

〔p〕の息をつめて破裂させる要領が[t] [ts] [tʃ]の調音要領の基礎づくりとして役立つからである。

○ 「タ、テ、ト」音の子音は[t]で「チ」音の子音は[tʃ]で、「ツ」の子音は[ts]であることを知って指導する必要がある。

○ 「タ、チ、ツ、テ、ト」が鼻音化して「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」にならないようにする。

○ 「タ、チ、ツ、テ、ト」が有声化して「ダ、ヂ、ヅ、デ、ド」にならないようにする。

○ 子音部の発音が強くなり過ぎないようにする。

○ 歯より舌先を出して発音しないようにする。

○ 「タ、チ、ツ、テ、ト」が「チャ、チ、チュ、チェ、チョ」にならないようにする。

○ 「タ、チ、ツ、テ、ト」が「ツァ、ツイ、ツ、ツェ、ツォ」にならないようにする。

○ 口声模倣だけで「タ、チ、ツ、テ、ト」音が出ない場合には、子どもの掌で息づかいを触知させ、それを真似て再現させるようにして誘導する。

〔タ・テ・ト〕音

○ 母音部に移る時、必要以上に下あごを下げないようにする。

〔チ〕音

○ 唇を左右に引き過ぎないようにする。

○ 「チ」が「ティ」にならないようにする。

○ 母音部が消えないように気をつける。

〔ツ〕音

○ 最初から唇を突き出した丸口で発音しないようにする。

○ 「タ、テ、ト」の調音位置である舌先で子音部を発しないようにする。

○ 母音部が消えないように気をつける。

〔テ〕音

○ 子音部より母音部「エ」に移る時、口角を左右に引き過ぎないようにする。

○ 「ア」の口形のまま「テ」と発音するのではなく、必ず口形も変化させて「エ」の口形で「テ」と発音する。

〔ト〕音

○ 「ア」の口形のまま「ト」と発音するのではなく、必ず口形も変化させて「オ」の口形で「ト」と発音する。

○ 母音部に移行する時、唇を小さく丸めて発音しないようにする。

○ 「ト」だけが特に高過ぎる声による発音とならないようにする。

5 「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音、指導上の留意点

〔ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ〕音、共通

○ 日常生活場面において「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音の基礎づくりを着実にしない、できるだけ口声模倣（口真似）や鼻の振動模倣によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり〔n〕や〔ɲ〕を指先で触知させたりして、頻度多く「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音を含むことばの口声模倣や振動模倣（鼻の）を

誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「ナ、ヌ、ネ、ノ」の子音〔n〕と〔ɲ〕の子音〔ɲ〕は違うことを知って指導に臨むようにする。

○ 「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」の指導に入る前に「マ、ミ、ム、メ、モ」の指導を確実にやっておくと、通鼻音で弱破裂という発音要領がよく似ているので、その分、「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」が出しやすくなるという効果がある。

○ 舌先に力を入れ過ぎて「ン・タ、ン・チ、ン・ツ、ン・テ、ン・ト」とならないようにする。

○ 子音部を強くして「ンナ、ンニ、ンヌ、ンネ、ンノ」と二音的に発音しないようにする。

○ 子音と母音を分離して「ン・ア、ン・イ、ン・ウ、ン・エ、ン・オ」と発音しないようにする。

○ 子音部を長くして「ンーナ、ンーニ、ンーヌ、ンーノ」と発音しないようにする。

○ 「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」が「ダ、ヂ、ヅ、デ、ド」にならないようにする。

○ 母音部まで全面的に鼻音化しないようにする。過鼻音化は発音全体を不明瞭にする。

○ 〔n〕を発する時、舌先を下歯の上にのせて発音しないようにする。

○ 〔n〕の調音に必要な弱破裂の要領を教えるには、まず両唇によるつば玉づくりから始めて、舌と上歯によるつば玉づくりを練習する。

○ 舌端を口蓋に密着できない子どもについては、舌端と口蓋との間に紙テープを挟んで引っ張り合いをする。

○ 「マ、ミ、ム、メ、モ」音や「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音、「ン」音の次に「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音がくることがばを用いて誘導するのもひとつの工夫である。

例 ミンナ、オンナ、モナカ、ムネ、マナイタ、ミナミ、マネ

〔ナ・ノ・ネ〕音

○ 母音部に移行する時、必要以上にあごを落

とさないようにする。

○ 母音部に移行する時、必要以上にゆるやかにあごを開かないようにする。

〔ニ〕音

○ 母音部に移行する時、唇の両端を引き過ぎないようにする。

○ 「ナ、ヌ、ノ、ネ」の子音の調音位置で発音しないようにする。

〔ヌ〕音

○ 母音部に移行する時、丸口の「ウ」にしたがり、両唇を突き出して発音したりしないようにする。

〔ネ〕音

○ 母音部の「エ」に移行する時、舌尖を下歯裏につけて舌を押し出し丸くして発音しないようにする。

〔ノ〕音

○ 母音部の「オ」に移行する時、ほほをへこませ、唇を丸口にすばめて発音しないようにする。

6 「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音、指導上の留意点

「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音、共通

○ 「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」は聴覚障害児の苦手とする音のひとつであるので、特に念を入れて指導するようにする。

○ 日常生活場面において「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣(口真似)や呼気模倣([h] [ç] [F]等の息づかいの模倣)によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、[h] [ç] [F]等を掌で触知させたりして、頻度多く「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音を含むことばをいくつも理解できるようにして

おく。

③ 子どもが自発的に「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」音を含むことばの口声模倣や呼気模倣(息づかいの模倣)を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「ハ、ヘ、ホ」の子音、[h]と「ヒ」の子音[ç]、「フ」の子音[F]は、それぞれ違うことを知って指導に臨むようにする。

○ [F]を指導してから、[s]を指導し、次に[j]の指導をし、その後[ç]の指導をし、それから[h]の指導に入るのも指導しやすい方法である。

○ 「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」を発音する時、子音部の息を使い過ぎないようにする。

○ 「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」を「h・ア、ç・イ、F・ウ、h・エ、h・オ」のように子音と母音を二つに分けて発音しないようにする。

○ 子音が強過ぎて母音のつきかねた「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」にならないようにする。

○ 子音部が長過ぎる「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」にならないようにする。

○ 子どもの掌に「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」の息を触知させ、温かい息であることを気づかせるようにする。「フ」の場合には一般に冷い息が出るとされているが、それはフーと物を吹くような場合の息づかいであり、ことばの中の「フ」は「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」と同じく温い息である。

○ 無声で「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」と息を鏡や窓ガラスに吹きかけて、それを真似て遊ばせながら子音の部分誘導するものひとつの方法である。

○ セロハン紙を掌に入るぐらいに切ったものを掌にのせて、「ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ」と息をかけて自動的に動かして遊ぶのも子音の部分誘

導するひとつの方法である。

〔ハ〕音

- 奥舌面を隆起させて「ハ」と発音しないようにする。
- 下あごを必要以上に落として発音しないようにする。

〔ヒ〕音

- 〔ç〕から母音部の「イ」に移行する時、唇を左右に引き過ぎて発音しないようにする。
- 調音点が前に来て「ヒ」を「シ」と発音しないようにする。

〔フ〕音

- ほほをふくらませた「フ」の発音にならないようにする。
- 両唇を突き出しすばめて「フ」と発音しないようにする。

〔ヘ〕音

- 口角を左右に引き過ぎて発音しないようにする。
- 舌を前の方にせり出し、前高にして発音しないようにする。
- 下あごを必要以上に落として発音しないようにする。

〔ホ〕音

- 「ア」の口形で舌だけを操作して「ホ」と発音しないようにする。
- ほほをへこませ、唇を小さく丸くして「ホ」と発音しないようにする。
- うがいをする位置のあたりで強い摩擦をさせて「ホ」と発音しないようにする。
- 必要以上に下あごを落として発音しないようにする。

7 「マ、ミ、ム、メ、モ」音、指導上の留意点

〔マ、ミ、ム、メ、モ〕音、共通

- 日常の生活場面において「マ、ミ、ム、メ、モ」音の基礎づくりを着実にしない、できるだけ口声模倣（口真似）や鼻の振動模倣によって自然に誘導するように心がける。この場合の原

則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「マ、ミ、ム、メ、モ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、〔m〕の振動を鼻翼や鼻の穴で触知させたりして、頻度多く「マ、ミ、ム、メ、モ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「マ、ミ、ム、メ、モ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「マ、ミ、ム、メ、モ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「マ、ミ、ム、メ、モ」音を含むことばの口声模倣や振動模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 両唇をしめ込み過ぎて強く破裂させ「マ、ミ、ム、メ、モ」が「ンバ、ンピ、ンブ、ンペ、ンポ」や「ンバ、ンビ、ンブ、ンベ、ンボ」にならないようにする。

○ 両唇の接触時間が長過ぎて「マ、ミ、ム、メ、モ」の子音〔m〕の部分が長くなって「ンマ、ンミ、ンム、ンメ、ンモ」とならないようにする。

○ 子音〔m〕から母音への移行が途切れて、「マ、ミ、ム、メ、モ」が「ンア、ンイ、ンニ、ンウ、ンエ、ンオ」とならないようにする。

○ 母音を先行させて「マ、ミ、ム、メ、モ」が「アマ、イミ、ウム、エメ、オモ」とならないようにする。

○ 「マ、ミ、ム、メ、モ」の母音部までも鼻音化させないようにする。

○ 「マ、ミ、ム、メ、モ」の発音誘導は、ことさら技巧をもてあそぶより、両唇を閉じて柔い声を通鼻させて、それから唇やあごを柔かく開閉させればよい。

○ 「マ、ミ、ム、メ、モ」の子音〔m〕に用いる呼気のエネルギーは普段呼吸している時鼻から出る呼気のエネルギーより遙かに弱いこと

を知って指導する。[m]の息づかいはごくほのかなものであり、強過ぎる[m]音にならないように気をつけたがよい。

○ 口声模倣だけで誘導できないこともあるので、その時は振動模倣も取り入れたがよい。

① 左の手を教師のほほに当てさせ、右手を教師の口許に近づけ、ほほから[m]音の振動を感知させ、口許であたたかい息を右手に感知させ、無理がないように模倣させて「マ、ミ、ム、メ、モ」を誘導する。

② 人さし指を教師の鼻の孔に軽く当てさせて[m]音を感知させ、それを模倣させて「マ、ミ、ム、メ、モ」を誘導する。

○ [m]音を発する基礎練習として無声でのつば玉づくり(両唇の間での)や「マ、ミ、ム、メ、モ」でのつば玉づくりをする。両唇を弱く破裂させる要領を会得させる練習として取り入れるものである。

○ 「ア、イ、ウ、エ、オ」音や「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」音、「マ、ミ、ム、メ、モ」音「ン」音が「マ、ミ、ム、メ、モ」音の前にくることばを用いて口声模倣によって誘導するのもひとつの工夫である。

例 ウマイ、オモイ、アマイ、アンマ、ウマ、ウミ、ナミ、ミミ、マンマルイ

[マ・メ・モ]音

○ [m]から母音部に移行する時、必要以上にゆっくり口を開けないようにする。

○ [m]から母音部に移行する時、必要以上にあごを落とさないようにする。

[メ]音

○ [m]から母音「エ」に移行する時、前舌をせり出して発音しないようにする。

8 [ヤ、ユ、ヨ]音、指導上の留意点

[ヤ、ユ、ヨ]音、共通

○ 日常の生活場面において「ヤ、ユ、ヨ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣(口真似)によって自然に誘導するように必がける。この場合の原則的な手順は次の通り

である。

① 日常生活の中で「ヤ、ユ、ヨ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたりして、頻度多く「ヤ、ユ、ヨ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ヤ、ユ、ヨ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「ヤ、ユ、ヨ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「ヤ、ユ、ヨ」音を含むことばの口声模倣を誘うようにする。そして狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「ヤ、ユ、ヨ」音を指導するには、「ヤ、ユ、ヨ」音の前に「イ」列音のついたことばを取り上げて指導した方が指導しやすい。例えば「オミヤ」は母音部の「イ」と「ヤ」の子音「イ」とがつながっているので指導しやすい。「ダリヤ」「イヤイヤ」等のことばも同一の種類であるので指導しやすい。

○ ことばの中で誘導しても「ヤ、ユ、ヨ」音が出ない時は「イーア」「イーオ」「イーウ」の間隔を序々に短くして言わせるようにして「ヤ、ヨ、ユ」音を誘導して行く。

○ 「イ」から「ヤ、ヨ、ユ」を誘導する時には完成時において「イア」「イーヤ」「イーヤー」「イオ」「イーオ」「イーオー」「イエ」「イーエ」「イーエー」等のように二音化しないようにする。

○ 子音部を長くして「イヤ」「イユ」「イヨ」とならないようにする。

○ 「イ」から「ヤ、ヨ、ユ」を誘導する時は、「イ」をごく軽く、短かく発音し、音が切れないようにして、「イ」+「ア」=「ヤ」「イ」+「オ」=「ヨ」「イ」+「エ」=「ヨ」にもっていくようにする。

○ 「ヤ、ユ、ヨ」が「シャ、シュ、ショ」や「ジャ、ジュ、ジョ」にならないようにする。

○ 子音部の[j]を発音する時、舌の高さが低く過ぎないようにする。

○ 「ヤ、ユ、ヨ」を発音する時、鼻音化しないように気をつける。

〔ヤ・ヨ〕音

○ 「ヤ、ヨ」を「タ、ト」と発音したり、「カ、コ」と発音したりしないようにする。

○ 子音部から母音部に移行する時、あまりにもゆっくりと口を開かないようにする。

○ 子音部から母音部に移行する時、必要以上にあごを落とさないようにする。

〔ユ〕音

○ 子音部より母音部に移行する時、口を突き出さないようにする。

〔ヨ〕音

○ 子音部より母音部に移行する時、口を突き出さないようにする。

9 「ラ、リ、ル、レ、ロ」音、指導上の留意点

〔ラ、リ、ル、レ、ロ〕音、共通

○ 日常生活場面において「ラ、リ、ル、レ、ロ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「ラ、リ、ル、レ、ロ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたりして頻度多く「ラ、リ、ル、レ、ロ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ラ、リ、ル、レ、ロ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「ラ、リ、ル、レ、ロ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「ラ、リ、ル、レ、ロ」音を含むことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「ラ」からでなく、「レ」や「ロ」から誘導

していった方が、無理のない「ラ、リ、ル、レ、ロ」が出やすい。

○ 「カラッポ」「コロコロ コロガッタ」「カレーコハカライ」「ワカラナイ」「トラ」「マル」といったように「ラ、リ、ル、レ、ロ」音が語中、ないしは語尾にきた方が指導しやすい。

○ 語中、語尾に「ラ、リ、ル、レ、ロ」音を含むことばをよく指導してから、語頭に「ラ、リ、ル、レ、ロ」音を含むことばを指導するようにしたがい。

○ 「ラ、リ、ル、レ、ロ」が「ウラ、ウリ、ウル、ウレ、ウロ」にならないようにする。

○ 「ラ、リ、ル、レ、ロ」が「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」とならないようにする。

○ 語頭に「ラ、リ、ル、レ、ロ」が来た時、子音部を無声化して発音しないようにする。

○ 下歯茎を舌先で弾いて「ラ、リ、ル、レ、ロ」と発音しないようにする。

○ 舌先をそりあげ過ぎて調音位置を奥にして発音しないようにする。聴覚障害児にはこのタイプの発音が非常に多く見受けられる。

○ 舌の形をスプーン状にして「ラ、リ、ル、レ、ロ」と発音する。その反対に舌先に力を入れて舌の幅を狭くして発音すると「ラ、リ、ル、レ、ロ」にはならない。

○ 全体的にあごを開け過ぎる傾向がある。

○ 「ラ、リ、ル、レ、ロ」音の前に「ア、イ、ウ、エ、オ」音が来ることばを用いて口声模倣をさせて誘導するのほひとつの工夫である。

例 アラレ、アラッタ、ワレタ、ワラッタ、ワラワレタ、ダルマ、アリ、テヲアライマショウ、オテラニオマイリヲシタ

〔ラ・レ・ロ〕音

○ 母音を先行させて「ラ、レ、ロ」が「アラ、エレ、オロ」とならないようにする。

○ 「ラ、レ、ロ」が「ダ、デ、ド」とならないようにする。

○ 「ラ、レ、ロ」が「タ、テ、ト」とならないようにする。

〔リ〕音

○ 舌を後退させ調音位置を奥にして発音しないようにする。

[ル] 音

○ 唇を突き出して発音しないようにする。

○ 舌を後退させて調音位置を奥にして発音しないようにする。

[レ] 音

○ 唇の両端を左右に引き過ぎて発音しないようにする。

○ 「ラ」とまぎらわしいほどにあごを落として発音しないようにする。

[ロ] 音

○ 母音に移行する時、口を突き出して発音しないようにする。

○ 「ラ」とまぎらわしいほどにあごを落として発音しないようにする。

10 「ワ」音、指導上の留意点

○ 「ワ」は調音の容易な音であるので、あまり技巧をこらさない方がよい。技巧をこらすと反って変な発音になる恐れがある。

○ 日常の生活場面において「ワ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「ワ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたりして頻度多く「ワ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ワ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「ワ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「ワ」音を含むことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「ワ」を「バ」と誤るものについては、鏡に向かって「ワ」と言って、その口形を見せ、唇を閉じないで「ウ」の口形から始まることに気

づかせて真似て言わせるようにする。

○ 「ワ」を「ウワ」と二音化する場合には、
① 掌を教師のほほに当てさせて唇の動きが瞬間的で、声の一つであることを理解させるようにする。

② 人差し指を口の中に入れ、その指を出しながら「ワ」と言わせて「ワ」に誘導する。

○ 息を先行させて「ワ」を「ファ」と発音する場合には、掌で「ワ」と「ファ」との息づかいの違いを触知させて「ワ」に方向づけていく。

○ 「わたくしわー」と「ワ」を長音化して発音しないようにする。

○ 鼻音化して発音しないようにする。「ワ」の音質が不明瞭になってくる。

○ 子音部を発する時、「ウ」と唇を突き出さないようにする。

11 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音、指導上の留意点

○ 日常の生活場面において「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音を沢山聞かせたり、読話させたりして頻度多く「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中でことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音の指導に入る前に「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音や、「ダ、デ、ド」音の指導を確実にやっておくようにする。「ガ、

ギ、グ、ゲ、ゴ」音の基礎づくりとして有効である。

○ 「カ、キ、ク、ケ、コ」音の指導や誘導に用いた方法は、「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音を指導する基礎となるので参考にしたがよい。

○ 声を出して「ガラ、ガラ」とうがいをする練習は「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音の基礎づくりとして有効である。

○ 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」が「アガ、イギ、ウグ、エゲ、オゴ」とならないようにする。

○ 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」が「グガ、グギ、グゴ、グゲ、グゴ」とならないようにする。

○ 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」が鼻音化して「ンガ、ンギ、ンゴ、ンゲ、ンゴ」とならないようにする。

○ 「ガ、グ、ゴ」の調音箇所が前過ぎて「ギャ、ギュ、ギョ」とならないようにする。

○ 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」が無声化して「カ、キ、ク、ケ、コ」とならないようにする。

○ 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」が語中や語尾に来る場合は鼻濁音の「カ̇、キ̇、ク̇、ケ̇、コ̇」になるものがあることを知って指導する必要がある。

例 マンガ、オンガク、サンガツ、ネンガジョウ

また、「～が」という格助詞や接続助詞も鼻濁音になることを知って指導する必要がある。

12 【ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ】音、指導上の留意点

○ 日常生活場面において「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたりして、頻度多く「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音

を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音を含むことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ 「サ、シ、ス、セ、ソ」音の指導や誘導に用いた方法は「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音を指導する基礎として役立つので参考にしたがよい。

○ 声を出して「ズー」とか、「ジー」とかストローを吹く練習は、「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音の基礎づくりとして有効である。この場合、教師のあごに子どもの手を触れさせてその振動を感知させ、これを真似て再現させるようにして誘導する。

○ 「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」が無声化して「サ、シ、ス、セ、ソ」とならないようにする。

○ 「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」が「タ、チ、ツ、テ、ト」とならないようにする。

○ 「ザ、ゼ、ゾ」が「ダ、デ、ド」とならないようにする。

○ 「ザ、ゾ、ズ」が「ジャ、ジョ、ジュ」とならないようにする。

○ 「ザ、ズ、ゼ、ゾ」音の子音[z]とジ音の子音[ʒ]とはちがうことを知って指導する必要がある。

○ 「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」を「ズア、ズイ、ズウ、ズエ、ズオ」と二音的に発音しないようにする。

○ 「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」を「ズアー、ズイー、ズウー、ズエー、ズオー」と引きのばして発音しないようにする。

○ 有声音の次に「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音のくることばによって指導すると誘導しやすい。「バンザイ」「オジイサン」「ムズカシイ」「ネズミ」「ドウゾ」「マズイ」「ミズ」「ウズラ」「カミ

クズ」「キジ」「ニジ」「ミジカイ」「イジワル」

13 【ダ、デ、ド】音、指導上の留意点

○ 日常生活場面において「ダ、デ、ド」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）や振動模倣（子音[d]の触知）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

- ① 日常生活の中で「ダ、デ、ド」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、教師のほほに手を当てさせて[d]の部分の振動を触知させたりして、頻度多く「ダ、デ、ド」音に触れさせておく。
- ② 日常生活の中で「ダ、デ、ド」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。
- ③ 子どもが自然に「ダ、デ、ド」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。
- ④ 日常生活の中で「ダ、デ、ド」音を含むことばの口声模倣や振動模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ず、それを子どもに知らせておく。

○ 「ダ、デ、ド」音の子音[d]は「タ、テ、ト」音の子音[t]と同じ構えで声を出す音であるので、「タ、テ、ト」音の指導や誘導に用いた方法は「ダ、デ、ド」音を指導する基礎として役立つので利用したがよい。

○ 「ダ、デ、ド」音の指導に入る前に「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音の指導を確立しておくとし、「ダ、デ、ド」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 鼻音の次に「ダ、デ、ド」音が来るようなことばを選んで口真似をさせると「ダ、デ、ド」音が誘導しやすい。

例 「マダマダ」「アミダナ」「メダマ」「ムダ」「ナミダ」「アマダレ」「ミドリ」「マド」「アマド」「トندا」「ウンドバ」「コンド」「バンド」

○ 有声音の次に「ダ、デ、ド」音の来るようなことばを選んで口真似をさせるのも「ダ、デ、ド」音を出やすくする一つの方法である。

例 「カラダ」「トダナ」「キビダango」「オダ

ngo」「ウデ」「フデ」「オイデ」「ユデダコ」「ウドン」「ブドウ」

○ 子どもの左手を教師のほほに当てさせ、右手を教師の口許近くに当てさせて、教師が「ダ、デ、ド」音や「ダ、デ、ド」音を含むことばを言ってやり、この時左手に感知した振動や右手に感知した息づかいを真似て再現させるようにする。このようにして口声模倣による発音・発語指導の限界をカバーするわけである。

○ 教師のほほに手を触れさせて「ダ、デ、ド」と「タ、テ、ト」の比較をさせ、自分の手を自分のほほに触れさせて、真似をさせ、序々に識別して発音するように持っていく。

○ 母音を先に出しながら「アーダ、エーデ、オーダ」「ウーダ、ウーデ、ウード」「オーダ、オーデ、オード」等のように発音させて、「ダ、デ、ド」音を誘導するのも一つの方法である。

○ 「ダ、デ、ド」音が「タ、テ、ト」音や、「ナ、ノ、ネ」音にならないようにする。

14 【バ、ビ、ブ、ベ、ボ】音、指導上の留意点

○ 「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音は、「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音や「マ、ミ、ム、メ、モ」音同様、調音しやすい音であるので、余り技巧をこらすことなく、できるだけ自然に最初から完全な音として誘導することが望ましい。

○ 「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音は「ダ、デ、ド」音、「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音、「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」音の発音要領を誘導する基礎となるのでぜひとも正確、明瞭に出るようにしておいたがよい。

○ 日常生活場面において「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音の基礎づくりを着実に行ない、できるだけ口声模倣（口真似）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

- ① 日常生活の中で「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、教師の唇に指を当てさせて[b]の部分の振動

を触知させたりして、頻度多く「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自然に「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を含むことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ず、それを子どもに知らせておく。

○ 語中や語尾に「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を含むことばを特に取り上げて口真似をさせながら誘導すると、「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音が自然に出やすい。

例 「オバアサン」「オーバー」「タバコ」「オビ」「ユビ」「クビ」「オブ」「カブラ」「オンブ」「コブ」「アブラ」「アブナイ」「オベントウ」「カベ」「オボン」「トンボ」「アカンボウ」

○ 母音を先行して出させながら「アーバ、イービ、ウーブ、エーベ、オーボ」「アーバ、アービ、アープ、アーベ、アープ」「オーバ、オービ、オーブ、オーベ、オーボ」「ウーバ、ウービ、ウーブ、ウーベ、ウービ」などと口真似をさせて「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を誘導する。先行する母音の長さを序々に短くしていった「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音をつくり上げていくわけである。

○ 「バ、ピ、プ、ベ、ポ」が「バ、ピ、プ、ペ、ポ」にならないようにする。「バ、ピ、プ、ペ、ポ」になる時は、教師の唇に手を当てさせて、「bー」と言って振動を感知させ、唇より少し離して「pー」と言って息が破裂する感じをとらえさせ、「バ、ピ、プ、ベ、ポ」と「バ、ピ、プ、ペ、ポ」を明確に出し分けるように方向づけていく。

○ 「バ、ピ、プ、ベ、ポ」が「マ、ミ、ム、メ、モ」にならないようにする。「マ、ミ、ム、メ、モ」になる時は、鼻から出す音と口から出

す音をはっきり識別させるために、教師の鼻の側面に指先を軽く触れさせ、「mー」と言って鼻にひびくのを感知させ、「bー」と言って鼻にひびかないことを知らせて、「バ、ピ、プ、ベ、ポ」と「マ、ミ、ム、メ、モ」を明確に出し分けるように方向づけていく。

○ 「バ、ピ、プ、ベ、ポ」を「アバ、イビ、ウブ、エベ、オボ」と二音化して発音しないようにする。

15 「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音、指導上の留意点

○ 「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音は調音が容易な音であるので、余り技巧をこらさないようにしたがい。

○ できるだけ最初から完成した「バ、ピ、プ、ペ、ポ」音として誘導することが肝要である。

○ 日常生活場面において「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音の基礎づくりを着実にしない、できるだけ口声模倣（口真似）や呼気模倣（[p]の息づかいの模倣）によって自然に誘導するように心がける。この場合の原則的な手順は次の通りである。

① 日常生活の中で「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を含むことばを沢山聞かせたり、読話させたり、[p]の息づかいを触知させたりして頻度多く「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音に触れさせておく。

② 日常生活の中で「バ、ピ、プ、ペ、ポ」音を含むことばをいくつも理解できるようにしておく。

③ 子どもが自発的に「バ、ピ、プ、ベ、ポ」音を含むことばを使ってきた時、必ず、そのことばを真似てやるなり、笑顔を返すなりして応じてやる。

④ 日常生活の中で「バ、ピ、プ、ペ、ポ」音を含むことばの口声模倣を誘うようにする。そして、狙いとする音が出た時は、必ずそれを子どもに知らせておく。

○ ろうそくの炎や、メリケン粉、みじん切りにした色紙の紙片、ティッシュペーパーを細く

裂いたもの、綿花、羽毛等を「パ、ピ、プ、ペ、ポ」の息づかいで吹かせる遊びは「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音の基礎づくりとして有効である。

○ 「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音は子音部である [p] の発音が強くなりがちであるので軽く破裂させるように気をつける。特に爆発的な一音的な「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音とならないよう留意する。ろうそくの炎を吹き消すほどの「パ、ピ、プ、ペ、ポ」の息づかいであってはならない。パツ、パツと炎がゆらめくぐらいでよい。

○ 「パ、ピ、プ、ペ、ポ」が「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」とならないようにする。「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」になる時は、掌を軽く唇に当てて、[p] と [b] の違いを触知させて識別させるようにする。

○ 「パ、ピ、プ、ペ、ポ」が「マ、ミ、ム、メ、モ」とならないようにする。

○ 「パ、ピ、プ、ペ、ポ」を発音する時、唇を両端に引いて子音部を発音して、「ピャ、ピュ、ピョ」とならないようにする。

○ 「プ」が「ピ」になる場合は子音部から母音部に移行する時の口形を横開きにするからであって唇をすばめることに気づかせれば正しい「プ」になってくる。

○ 「パ」「ピ」「プ」「ペ」「ポ」は一音として指導するよりは、それらの音を含む語、句、文を用いて指導するのが本来のやり方である。そして、そのようなやり方だけではどうしても「パ、ピ、プ、ペ、ポ」がうまく出ない場合にこそ一音としての指導が必要となってくるのである。

16 [キャ、キュ、キョ] 音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「キ」音を確立しておくとして「キャ、キュ、キョ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「カ、キ、ク、ケ、コ」音指導の要領を「キャ、キュ、キョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

○ 「キャ、キュ、キョ」が「カ、ク、コ」と

ならないようにする。

○ 「キャ、キュ、キョ」が「キヤ、キユ、キヨ」とならないようにする。

○ 「キャ、キュ、キョ」が「キア、キウ、キオ」とならないようにする。

○ 「キャ、キュ、キョ」が「ギヤ、ギユ、ギョ」とならないようにする。

○ 「キャ、キュ、キョ」が「チャ、チュ、チョ」とならないようにする。

17 [シャ、シュ、ショ] 音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「シ」音を確立しておくとして「シャ、シュ、ショ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「サ、ス、セ、ソ」音、同類音である「シ」音指導の要領を「シャ、シュ、ショ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

○ 「シャ、シュ、ショ」が「チャ、チュ、チョ」とならないようにする。

○ 「シャ、シュ、ショ」が「シヤ、シユ、シヨ」とならないようにする。

○ 「シャ、シュ、ショ」が「シア、シウ、シオ」とならないようにする。

○ 「シャ、シュ、ショ」が「サ、ス、ソ」とならないようにする。

○ 「シャ、シュ、ショ」を「シチャ、シチュ、シチョ」と発音しないようにする。

○ 「シャ、シュ、ショ」が「ジャ、ジュ、ジョ」とならないようにする。

○ 「シャ」の構音箇所は「ヒャ」よりも前である。

18 [チャ、チュ、チョ] 音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「チ」音を確立しておくとして「チャ、チュ、チョ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「タ、ツ、テ、ト」音、同類音である「チ」音指導の要領を「チャ、チュ、チョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

る。

○ 「チャ、チュ、チョ」が「タ、ツ、ト」とならないようにする。

○ 「チャ、チュ、チョ」が「チヤ、チュ、チヨ」とならないようにする。

○ 「チャ、チュ、チョ」が「チア、チウ、チオ」とならないようにする。

○ 「チャ、チュ、チョ」が「ニヤ、ニュ、ニョ」とならないようにする。

19 「ニヤ、ニュ、ニョ」音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ニ」音を確立しておく、「ニヤ、ニュ、ニョ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「ナ、ヌ、ネ、ノ」音、同類音である「ニ」音指導の要領を「ニヤ、ニュ、ニョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

○ 「ニヤ、ニュ、ニョ」が「ナ、ヌ、ノ」とならないようにする。

○ 「ニヤ、ニュ、ニョ」が「ニヤ、ニュ、ニヨ」とならないようにする。

○ 「ニヤ、ニュ、ニョ」が「ニア、ニウ、ニオ」とならないようにする。

○ 「ニヤ、ニュ、ニョ」が「チャ、チュ、チョ」とならないようにする。

○ 「ニヤ」が「タ」にならないようにする。

20 「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ヒ」音を確立しておく、「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「ハ、フ、ヘ、ホ」音、同類音である「ヒ」音指導の要領を「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

○ 「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」が「ヒヤ、ヒユ、ヒヨ」とならないようにする。

○ 「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」が「ヒア、ヒウ、ヒオ」とならないようにする。

○ 「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」が「ヤ、ユ、ヨ」とならないようにする。

○ 「ヒヤ、ヒュ、ヒョ」が「シャ、シュ、シヨ」とならないようにする。

○ 「ヒヤ」の構音箇所は「シャ」よりも奥である。

21 「ミヤ、ミュ、ミョ」音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ミ」音を確立しておく、「ミヤ、ミュ、ミョ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「マ、ミ、ム、メ、モ」音指導の要領を「ミヤ、ミュ、ミョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

○ 「ミヤ、ミュ、ミョ」が「マ、ム、モ」とならないようにする。

○ 「ミヤ、ミュ、ミョ」が「ミヤ、ミュ、ミヨ」とならないようにする。

○ 「ミヤ、ミュ、ミョ」が「ミア、ミウ、ミオ」とならないようにする。

○ 「ミヤ、ミュ、ミョ」が「ピヤ、ピュ、ピョ」とならないようにする。

○ 「ミヤ、ミュ、ミョ」が「ビヤ、ビュ、ビョ」とならないようにする。

22 「リヤ、リュ、リョ」音、指導上の留意点

○ 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「リ」音を確立しておく、「リヤ、リュ、リョ」音の基礎づくりとして役立つ。

○ 類似音である「ラ、リ、ル、レ、ロ」音指導の要領を「リヤ、リュ、リョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。

○ 「リヤ、リュ、リョ」が「リヤ、リュ、リヨ」とならないようにする。

○ 「リヤ、リュ、リョ」が「リア、リウ、リオ」とならないようにする。

○ 「リヤ、リュ、リョ」が「ラ、ル、ロ」とならないようにする。

○ 「リヤ、リュ、リョ」が「ナ、ヌ、ノ」とならないようにする。

23 【ギャ、ギユ、ギョ】音

- 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ギ」音を確立しておくとして「キャ、キュ、キョ」音の基礎づくりとして役立つ。
- 類似音である「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音指導の要領を「ギャ、ギユ、ギョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。
- 「ギャ、ギユ、ギョ」が「ガ、グ、ゴ」とならないようにする。
- 「ギャ、ギユ、ギョ」が「キャ、キュ、キョ」とならないようにする。
- 「ギャ、ギユ、ギョ」が「カ、ク、コ」とならないようにする。
- 「ギャ、ギユ、ギョ」が「ギヤ、ギユ、ギョ」とならないようにする。
- 「ギャ、ギユ、ギョ」が「ギア、ギウ、ギオ」とならないようにする。

24 【ジャ(チャ)、ジュ(チュ)、ジョ(ヂョ)】音、指導上の留意点

- 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ジ」音を確立しておくとして「ジャ、ジュ、ジョ」音の基礎づくりとして役立つ。
- 類似音である「ザ、ズ、ゼ、ゾ」音、同類音である「ジ」音指導の要領を「ジャ、ジュ、ジョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。
- 「ジャ、ジュ、ジョ」が「ザ、ズ、ゾ」とならないようにする。
- 「ジャ、ジュ、ジョ」が「ジア、ジュ、ジョ」とならないようにする。
- 「ジャ、ジュ、ジョ」が「ジア、ジウ、ジオ」とならないようにする。
- 「ジャ、ジュ、ジョ」が「シャ、シュ、ショ」とならないようにする。
- 「ジャ、ジュ、ジョ」が「チャ、チュ、チョ」とならないようにする。

25 【ピャ、ピュ、ピョ】音、指導上の留意点

- 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ピ」音を確立しておくとして「ピャ、ピュ、ピョ」音の基礎づくりとして役立つ。
- 類似音である「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音指導の要領を「ピャ、ピュ、ピョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「バ、ブ、ボ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ピヤ、ピユ、ピヨ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「パ、プ、ポ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ピヤ、ピユ、ピョ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ピア、ピウ、ピオ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ミヤ、ミュ、ミョ」とならないようにする。

26 【ピャ、ピュ、ピョ】音、指導上の留意点

- 母音の「イ」音や「ヤ、ユ、ヨ」音、「ピ」音を確立しておくとして「ピャ、ピュ、ピョ」音の基礎づくりとして役立つ。
- 類似音である「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音指導の要領を「ピャ、ピュ、ピョ」音誘導のヒントとして役立てるようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ピヤ、ピユ、ピヨ」にならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「パ、プ、ポ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ミヤ、ミュ、ミョ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ピヤ、ピユ、ピョ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「ピア、ピウ、ピオ」とならないようにする。
- 「ピャ、ピュ、ピョ」が「プア、プウ、プオ」とならないようにする。

27 【ン】音(ぼん) 指導上の留意点

○ 撥音は仮名文字では「ン」や「ん」で表記するが、ことばの中で用いられる時は、次に来る音によって発音の仕方がいろいろ変化することを知って最初から区別して指導する必要がある。その種類は凡そ次の通りである。

(1) [m]……唇を閉じ発音する場合。

① 「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音が後続する場合。
ア②パン、トラ②プ、デ②ポー、エ②ピツ

② 「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」音が後続する場合。
ア②バイ、ト②ビ、セ②ブ、ハ②ブン、セ②ベイ、カクレ②ボ

③ 「マ、ミ、ム、メ、モ」音が後続する場合。
マ②マル、サ②マ、ア②マ、セ②メンキ

(2) [n]……唇を開き、舌尖を上歯茎につけて発音する場合。

① 「タ、ツ、テ、ト」音が後続する場合。
セ②タク、エ②トツ、ベ②トウ、バ②ツ

② 「ダ、デ、ド」音が後続する場合。
カレ②ダー、シャボ②ダマ、ラ②ドセル、ウ②ドウバ

③ 「ナ、ヌ、ネ、ノ」音が後続する場合。
オ②ナ、ミ②ナ、ネ②ネ、マ②ネンヒツ

④ 「ラ、リ、ル、レ、ロ」音が後続する場合。
ベ②リ、シ②ルイ、セ②ロ

(3) [ɾ]……唇を開き、中舌を上げて発音する場合。

(1) 「ニ」音や「ニャ、ニュ、ニョ」音が後続する場合。

コ②ニクワ、コ②ニャク、サ②ニン、エ②ニチ

(2) 「チ」音や「チャ、チュ、チョ」音が後続する場合。

ラ②チ、ヤ②チャ、コ②チュウ

(4) [ŋ]……唇を開き、奥舌を軟口蓋につけて発音する場合。

(1) 「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」音が後続する場合。
マ②ガ、ド②グリ、ニ②ゲン、ダ②ゴ

(2) 「カ、キ、ク、ケ、コ」音が後続する場合。
ハ②カチ、ペ②キ、ジャ②ケンポン、メ②コ

(3) 「キャ、キュ、キョ」音が後続する場合。

ベ②キョウ、デ②キユウ

(4) 「ギャ、ギュ、ギョ」音が後続する場合。

ニ②ギョウ、キ②ギョ

(5) [ŋ]……唇を開き、奥舌が軟口蓋に触れるか触れないかの感じで「ン」と発音する場合。

主として語尾にくる音である。

バ②ン、ペ②ン、エホ②ン、カバ②ン、フト②ン、ダイコ②ン、オカアサ②ン

「ン」の発音を全部唇を閉じた [m] 音で教える教師がよくいるが、それは明確に間違いである。

28 〔促音〕指導上の留意点

○ 促音というのは「つまる音」で仮名文字による表記では小さい「ッ」や「っ」で表わされる音である。しかしながら一つの音として現われる現象ではなく、常にことばの中に現われる現象であって、音声の流れを一時的に抑止したり閉鎖したりすることによってつくられる発音である。文字で表記すれば「ッ」一文字であるが実際の促音にはいくつかの類型があるので、それを知って指導する必要がある。

(1) 息が唇でつまる場合。

次に「パ、ピ、プ、ペ、ポ」音が来る時、ラッパ、キップ、テッポウ。

(2) 息が舌の先でつまる場合。

次に「タ、チ、ツ、テ、ト」音が来る時、バッタ、ポケット、イットウ、キッテ、マッチ、スイッチ。

(3) 息が舌の奥でつまる場合。

次に「カ、キ、ク、ケ、コ」音が来る時、マツカ、ガッコウ、カケッコ、セッケン。

(4) 息が舌の中ほどでこすれる場合。

次に「サ、シ、ス、セ、ソ」音が来る時、マッスグ、マッサオ、マッシロ、イラッシャイ。

また、促音が正しく使えないと、促音を含むことばのスピーチ・パターン（話しことばとしての像）が壊されるので、その分、明瞭度が悪くなり、聴き手に伝わり難くなってくる。

○ 「キップ」を「キブ」などと促音部を脱落

させないようにする。

○ 「ガツコウ」を「ガツコウ」などと促音部を「ツ」音化して発音しないようにする。

○ 「キッテ」が「キンテ」などと促音部が「ン」音化しないようにする。

○ 「キップ」を「キイプ」などと促音部を長音化して発音しないようにする。

29 【母音の無声化】指導上の留意点

○ 実際の話しことばの中で「ウ」列や「イ」列の母音部が自然に無声化されて発音されることを「母音の無声化」と呼んでいるが、これは日本語の発音にめりはりをつけ、歯切れをよくする役割を果たしている。したがって、聴覚障害児だからそこまでは手が届かないと弱音をはいたり、放って置いたりすることなく、やはり、日本語の発音現象の一つとして指導の手を入れることが必要である。

そのためには、無声化現象の起きやすい音節にはどのようなものがあるか一応知っておくことが便利である。

[ki] ア㊦カゼ, ㊦ツネ, ㊦シャ, ㊦ク
[ku] イ㊦ツ, ㊦スリ, ㊦チ, オ㊦サン
[ʃi] ア㊦シタ, ㊦カク, オス㊦, ㊦ッポ
[su] ㊦コシ, ㊦キー, ㊦ッバイ, ㊦スキ
[tʃi] ゴ㊦ソウ, ㊦カイ, モ㊦ツキ, ㊦カラ
[tsu] ツキ, ツクエ, ウソ㊦ツキ, ㊦チ
[ʃi] オ㊦サマ, ㊦シガタ, ㊦トツ, ㊦クイ
[Fu] ㊦クロ, ㊦スマ, ㊦タ, ㊦トン, ㊦キ
[pi] ㊦カ㊦カ, ㊦ク㊦ク, ジッ㊦キ
[pu] ㊦カ㊦カ, ㊦ク㊦ク

そして、無声化すべき音について無声化すべく指導して行くことが大切である。

ア㊦タ, タベマ㊦タ, イキマ㊦, バナナ㊦㊦, ㊦コウキなど。

○ 母音の無声化について分析的、抽出的指導をするのは、一応音節（音韻）指導が終了した頃がよい。

30 【㊦列・㊦列】音、指導上の留意点

○ これらの音のうち、特に調音部位を全く見ることのできない音については、同行音の調音要領からの類推により誘導していくようにする。

例 カ→ケ→㊦ ラ→ロ→㊦

お わ り に

聴覚障害児に対する発音・発語指導というのは、一音一音としての指導、語としての指導など、どのような位相の扱いをするにせよ、どこまでも正常な発音・発語の発達を援助するという立場の下に時間をかけて最大限に聴覚から日本語としての正しい発音・発語の音声情報モデルを入れ、不足分を触覚、振動感覚、筋肉運動知覚、視覚（口形、舌等の形状、位置、動きの変化を見て真似る）等の感覚で補完しながら、聴覚障害児の有する野性としての発声や発音を日本文化としての日本語の発音・発語に凝集、体制化していく過程であるという認識の下に実施されることが最も望ましいあり方である。このような方向性を逸脱すると子どものレディネスや必要から遊離した偏った発音・発語指導に陥る恐れがあるので十分留意してかかる必要がある。

参 考 文 献

- 今井柳三 発語発音指導体系 愛知県立名古屋聾学校 昭和29年
大塚明敏 幼ろう児の special skill の指導について 一息と声の指導— 東京教育大学国府台分校 聴能研究室記要 第1巻 昭和34年
久保山とも 発音発語指導 自家出版 昭和35年
久保山とも 発音発語指導後篇 自家出版 昭和44年
坂田午二郎 発音・発語指導 日本特殊教育協会 昭和48年
大塚明敏 聴覚障害をもつ乳・幼児の発音・発語指導 筑波大学附属聾学校紀要 第4巻 昭和57年